

# 定時制高校生のソーシャルスキルに対する認知のゆがみの研究

○満石花歩<sup>1</sup>・吉良悠吾<sup>1, 2</sup>・尾形明子<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>広島大学大学院教育学研究科, <sup>2</sup> 向洋こどもクリニック)

## 目的

定時制高校では、他者と関わりを持つ機会が乏しかった生徒が多いと考えられ、ソーシャルスキルの低さが学校適応を妨げる要因となることが指摘されている(紅谷, 2001; 磯田, 2009)。ソーシャルスキルの獲得を目指す介入として、ソーシャルスキルトレーニング(以下, SST)がある。SSTでは主に他者との関わる際のスキルを学習するが、スキルの学習だけでは効果が低く(佐藤, 2006)、認知的なアプローチを併せて行うことも多い。その理由として、出来事を過剰にネガティブに捉える傾向である認知のゆがみがソーシャルスキルの発揮に影響を与えることが示唆されている(加計ら, 2008)。しかしながら、対人場面における認知のゆがみには複数の側面があることが示されているもの(岡安, 2009)、加計ら(2008)は認知のゆがみを一因子で測定しており、どのような認知のゆがみの変容がソーシャルスキルの発揮に影響するかは明らかでない。そこで本研究では、高校生においてどのような認知のゆがみがソーシャルスキルの発揮に影響するのかを検討する。

## 方法

**対象者** A 県内のある高校の1年生計190名(男性102名, 女性86名, 不明2名; 平均年齢15.18歳,  $SD=.52$ )。

**調査時期** 2018年5月上旬に調査を実施した。

**質問項目** ソーシャルスキル; ソーシャルスキル自己評定尺度短縮版(吉良・尾形・上手, 2018)の下位尺度のうち、実際に対人行動におけるスキルである「関係開始」「関係維持」「主張性」、認知過程におけるスキルである「解読」「感情統制」を使用した(全16項目4件法)。

認知のゆがみ; 高校生用対人関係場面における認知のゆがみ尺度(岡安, 2009)を使用した(全16項目, 4件法)。下位因子は「自信欠如」「自己卑下」「他者配慮」「他者排除」である。

## 結果

認知過程におけるスキルである「解読」「感情統制」の影響を統制した上で認知のゆがみが対人行動に与える影響を検討するために、階層的重回帰分析を行った。「関係開始」「関係維持」「主張性」

をそれぞれ目的変数とし、step1に「解読」「感情統制」、step2に「自信欠如」「自己卑下」「他者配慮」「他者排除」を投入した(Table 1.)。自己卑下は関係開始、関係維持と負の関連を、自信欠如は主張性と負の関連、他者排除と正の関連を示した。

Table 1. 行動スキルを目的変数とした階層的重回帰分析の結果

説明変数	関係開始			関係維持			主張性					
	$\Delta R^2$	$\Delta F$	$\beta$	$SE$	$\Delta R^2$	$\Delta F$	$\beta$	$SE$	$\Delta R^2$	$\Delta F$	$\beta$	$SE$
Step 1												
解読			.29 **	.07			.56 **	.06			.13 †	.07
感情統制	.14	13.22 **	-.21 **	.07	.32	40.37 **	.10	.06	.07	6.73 **	-.23 **	.06
Step 2												
解読			.29 **	.07			.58 **	.06			-.16 *	.07
感情統制			-.23 **	.07			.06	.06			-.24 **	.07
自信欠如			.02	.08			.00	.08			-.21 †	.08
自己卑下			-.55 **	.07			-.20 *	.06			-.11	.07
他者配慮			.06	.07			.04	.06			-.14	.07
他者排除	.21	13.44 **	.13	.09	.04	2.79 *	-.03	.08	.08	3.81 **	.24 *	.09

†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

## 考察

自己卑下的な認知のゆがみが関係開始と関係維持スキルの低下に関連することが示され、特に関係開始スキルへの影響が大きかった。自己卑下の項目は、「クラスメイトは、私と話をしても面白くないと思っているはずだ。」等である。自分は他者から低く評価を受けていると思込んでいることで、関係を開始したり維持したりしようとする等、他者と関わりを持つことを避けようとする考えられる。さらに、自己卑下的な認知のゆがみが強いと、行動を起こした結果として生じる肯定的、またはニュートラルな相手の反応を否定的に認識することで、関係を築く行動が促進されない可能性がある。一方で、「自分がつまらない人間だと思われないように、無理して話をするべきだ。」などと感じやすい自信欠如的な認知のゆがみが主張性の低さと関連した。自分の意見を主張すると他者に否定的に捉えられるのではないかという不安があると、主張スキルを獲得したとしても、主張行動に至りにくいことが考えられる。加えて、他者排除的な認知が主張を促進することも示された。他者の敵意のない行動を自身に向けて攻撃していると認識しやすく、攻撃されたと感じるとそれに対して自身も攻撃的に主張行動を行う可能性がある。

本研究は、ソーシャルスキルが発揮されない背景にある認知のゆがみを明らかにし、SSTでスキルの学習に併せて特定の認知のゆがみへの介入が効果的である可能性を示唆した。